



担子菌類の子実体形成機構の解析

生活環境科学系・食物栄養学領域

小倉 裕範

教授

OGURA Yasunori

博士(医学)(京都大学)

■研究キーワード 分子生物学、細胞生物学、免疫学、真菌学

■主な所属学会 日本菌学会、日本ゴマ科学会、日本家政学会、日本免疫学会

■研究者総覧 <https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.ec67519ba0f99b09520e17560c007669.html>



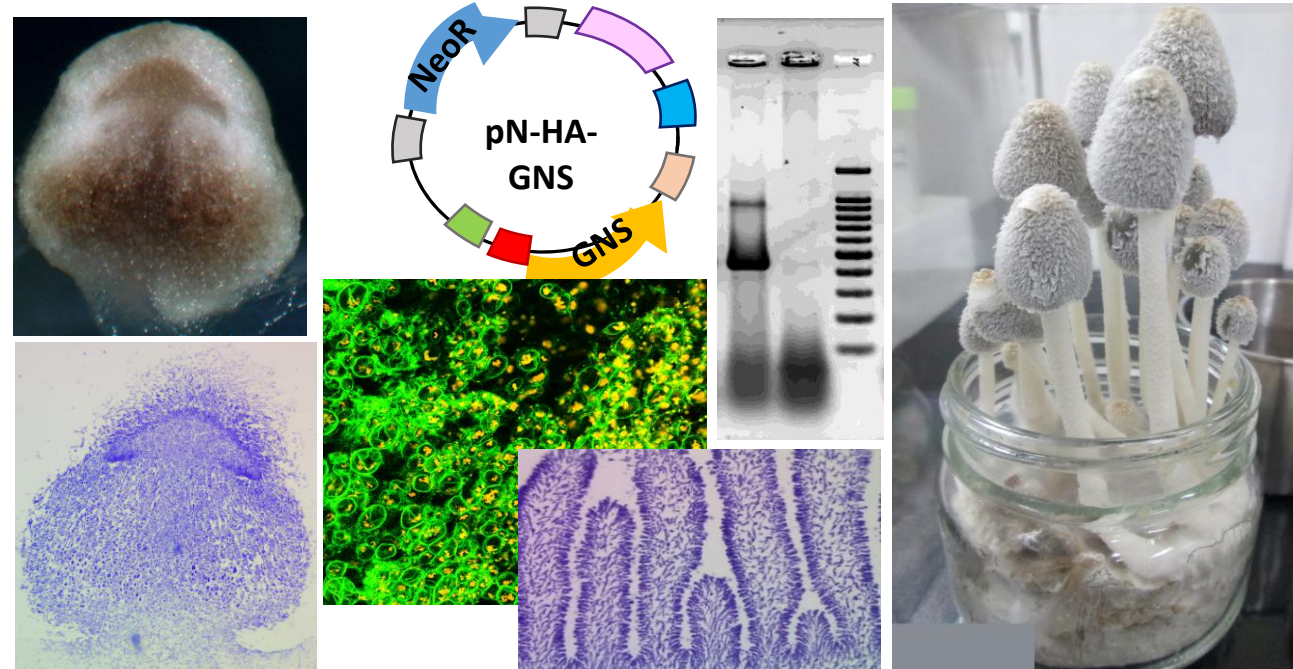
研究者総覧

研究概要

分子生物学とは生命現象を細胞レベルまたは分子レベルで説明する学問分野です。私は特に発生、生殖、免疫に関心をもっています。現在は主に次のような研究に携わっています

<1>免疫学および感染症学：身体の中に入ってくる物質には栄養として有用なものもあれば、感染性病原体や毒物など有害なものもあります。私たちの身体が有害なものに対処する仕組みの解明が関心のひとつです。

<2>担子菌類(キノコ類)の子実体形成機構の解明：子実体ができあがる仕組みの詳細を明らかにし、栽培や品種改良に役立てるとともに、遺伝的改変によりもっと有用な特性を持つ菌類を作り出せないかと考えています。



アピールポイント

何故キノコなのか説明させてください。私が本学食物栄養学科に着任した時、食べ物の勉強を指向する学生さんたちと一緒にいったい何の研究をしたらよいのかと悩みました。そして気づいたのは、人類が未来永劫、今食べているものを食べ続けられる保証はないということでした。地球温暖化、人口爆発、食品ロス削減、アニマルフリーへの転換など、人類を取り巻く食環境は大きく変化しています。また、たとえこれら目前の問題を解決したとしても、地球環境は自然にもっと変わっていくはずで。人類が一千年後も一万年後も生き延びるためには、積極的に環境変化に順応し、食べ物を確保していく必要があります。そのために私にできることはないだろうか真剣に考えました。その答えのひとつが菌類の研究でした。菌類は生態系のなかで物質の循環を担い、特に人類が食べ物として利用できない植物遺骸を人類が利用できる物質に変換してくれる生き物です。そこで私は、菌類を人類にとって都合よく改造し、物質循環と食品生産を制御する道具とすることができないか、と考えました。遺伝子組換え食品の普及には慎重であるべきだと思います。しかし、何もせず手をこまねいてみている余裕はありません。遺伝子工学の技術を菌類に応用し、未来の食生活に貢献できる可能性を探ることにした次第です。

そんな壮大なことを考えたわりには、小さなキノコ(ウシグソヒトヨタケ)を使いながら、学生さんたちと日々小さな発見を重ねています。でもいつか、これらの蓄積が人類の役に立つ日が来ると確信しています。